

二つの御遷宮から考える

木村嘉富



1. はじめに

一昨年にはなるが、平成 25 年に日本を代表する 2 つの神社で御遷宮が行われた。伊勢神宮の式年遷宮と、出雲大社の大遷宮である。いずれも西暦 600 年代には建設されており、現在まで 1,300 年以上続いている神社である。社会資本の老朽化が重要な課題であり、国総研や土研でも各種技術の開発や技術政策について取り組んできている。本稿ではこの二つの御遷宮について、構造上の工夫や事業の進め方に着目し、社会資本の維持管理や更新について考えてみたい。

2. 伊勢神宮の式年遷宮と出雲大社の大遷宮

私にとって、この二つの神社は縁の深い神社である。出雲大社は、私の出身地の島根県にある。大国主大神が御祭神で、縁結びの神社として有名である。旧暦の 10 月には全国の神々が集まって相談されることから、全国では神無月、出雲では神在月となっている。

伊勢神宮は三重県にあり、皇室の氏神である天照大神が祀られている。私は平成 18 年、19 年に三重県で勤務し、平成 25 年の御遷宮に向けた道路整備を担当していた。家族でお木曳きに参加したこともある（写真-1）。伊勢神宮は道路にとっても縁が深く、大正 9 年の道路法に基づき指定された国道 1 号は、東京を起点として終点が伊勢神宮とされていた。

平成 25 年はこの二つ神社で御遷宮が行われた年であり、参拝された読者の方も多いのではないだろうか。二つの遷宮は、同じ遷宮といっても考え方が全く異なっている。伊勢神宮は「常若」の考え方で、20 年毎に内宮、外宮の正殿のみならず別宮の正殿や宝殿、鳥居など全ての社殿が新しく作り替えられている。装飾や宝物、調度品の他、宇治橋も架け替えられる。毎朝太陽が新しく昇るように、全てのものが更新されているのである。

この式年遷宮は 690 年に第 1 回が行われ、途中中断や延期はあったものの、前回第 62 回遷宮まで 1300 年以上継続している。

一方、出雲大社は「蘇り」の考え方で、60 年毎に痛んだ部分のみ修復されて使い続けている。大規模修繕といったところである。現在の本殿は 1744 年に建設されたといわれ、今回は 4 回目の修繕である。なお、本殿は今でも高さ 24m と大規模なものであるが、かつては 48m、さらに古くは 96m もあったといわれている（写真-2）。

3. 出雲大社の長寿命化への配慮

現在の社会インフラで用いている鋼材やコンクリートにとっても同様であるが、木材にとって水が一番の劣化要因である。屋根の素材としては、20 年持てばよい伊勢神宮では萱葺き屋根となっているのに対して、出雲大社は檜の皮が使われている。樹齢 100 年以上の檜から剥がされた長さ 1.2m の皮が 70 万枚も使われ、その厚さは最も厚いところで 1m にもなっている。また屋根の下の構造としても、一番上の板では雨が流れやすいようにくぼみが設けられ、板の継ぎ目には防腐材が施されるなど、水に対する各種配慮がなされている。このような構造であった為か、60 年ぶりの補修でも檜の皮の交換のみで済み、その下の構造はそのまま使える状態だった。



写真-1 伊勢神宮のお木曳き（筆者）



写真-2 出雲大社復元模型

柱の建て方についても、伊勢神宮は地面に掘った穴に直接柱を建て込む掘立式に対して、出雲大社は腐食しにくいよう礎石の上に建てられている。なお、出雲大社も当初は掘立式であり、老朽化のために幾度か建て替えられたようである。1609年に礎石柱となり、以降60～70年毎の修理となっている。余談となるが、木も完全に水中にあると長持ちする。東京の丸ビルや新潟の万代橋の基礎杭として用いられていた木杭は、改修時に掘り出された実物が展示されている。

このような水に対する配慮は現在の構造物にも通じるものである。道路橋では床版に防水層を設けるとともに、万一雨水が浸透したとしても、部材中の滞水を避けるために、構造物の各部は排水が確実にできるような構造を求めている。出雲大社も当初から現在の構造であったわけではなく、工夫を重ねることにより270年以上長持ちさせる構造にたどり着いたのではないかと。私たちも日頃の管理業務を通じて水の状態や損傷状況を把握し、工夫していくことが不可欠と言える。国総研では現在共同研究により維持管理しやすい構造に取り組んでおり、基準等へ反映させたい。

4. 技術を継承する伊勢神宮

伊勢神宮からは、事業の進め方に学ぶべき事項が多い。伊勢神宮の場合は20年毎に同じ事が繰り返されており、技術の継承の観点からも有効である。また、正殿のみでなく他の宮も逐次建て替えていくため、仕事が切れ目無く続いていく。一方、出雲大社は60年毎であるので、単独では技術の継承は出来ない。今回の出雲大社の修繕では他の伝統建築の修繕で継承された技術者が活躍さ

れたそうである。

イベントとしてもよく考えられている。私が参加したお木曳は、平成19年であり、25年の御遷宮の6年も前である。この当時から御遷宮で多くの観光客が訪れ、地域がわいていた。単に20年に1回のイベントではなく、時間的にも切れ目無く行事が続いている。レジャー施設にリピーターを呼ぶためにはアトラクションを定期的に新しくしていくことが求められるというが、まさにそのような仕掛けが施されている。

橋梁においても、全ての橋梁を使い続けるのではなく、社会的に影響が小さい小規模橋梁は架け替えるという自治体もある。架け替える際にはその作業空間が必要となる。伊勢神宮を参拝された方はお気づきだろうが、御神殿ではその横に全く同じ寸法の空間が確保されている。橋においてこのような空間を確保することは困難かもしれないが、江戸時代の橋では技術的制約等から橋詰め広場が設けられていた。関東大震災の震災復興計画では取り付け道路の幅員の1/2ずつの広さの橋詰め空間を両側に確保するよう規定され、交番、トイレ、撒水ポンプの格納庫が配置されていた。その後これらの機能は他の空間で代替されたことから、1958年に制定された道路構造令では橋詰め広場は規定されていない。橋詰めの空間は維持管理や更新の際に利用することができ、また、平時は賑わい空間や防災拠点としての活用が期待できる。用地の制約はあろうが、更新時には一考に値するのではないかと。

5. おわりに

社会資本の老朽化が重要な課題となる現在において、1300年以上にわたって継承されてきた2つの神社の御遷宮から学ぶことは多い。維持管理戦略、長持ちさせる工夫、技術の伝承、事業の継続等、それぞれの立場の技術者によって得られるものは異なってくる。どちらにも博物館があり、土木技術者の視点からも興味深い展示物も多いので、御参拝の際は見学されることをおすすめする。

参考文献

出雲大社に関する記述については次を参考とした。

- 1) 中野晴生：出雲大社 平成の大遷宮、JTB パブリッシング、2013